

第二期 第三十五号 (三版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2019.06.20 定有堂書店 発行

果敢な本屋たち

本と人と旅と

文字数のあとがき

品川区大井町の「ベンセレーモス・ビル」で何だ？

湖山↓出町柳↓吉祥寺 転勤族の家探し

『おっさんラフンデー』さらば昭和よ』

なにやってんだ

くらし・道真・記憶

神の都の現状

鯉魚翻(こい)はやさしきかせにのり)

坪井日記⑬

楽しさってなんだ

青空と本屋

鳥取あれこれ その三十四

フランクとブルックナー

三人称小説の練習

奈良 敏行

南陀楼綾繫

ワクサカソウエイ

萩原 俊郎

吉田 海将

五島 朋子

島居 貴彦

結川 真悟

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

うしきのどか

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

古賀 啓三

朴葉むすび

すくい服

…… 編集後記

あきの素生

ドクメリア



## 果敢な本屋たち

奈良 敏行

(定有堂 店主)

先日県内の情報誌から取材の打診があった。下り坂の本屋なので戸惑うところもあり動機を訊ねた。困窮つづきの出版流通の世界で「常に果敢に発信しつづけている」一点に興味がある、という単刀直入の返答だった。

ここでこの「果敢」という言葉に出会い驚いた。天から降りてくる響きにも聞こえた。

辞書的にはいくつかのグラデーションがあったが、「(自分の命や将来の情勢がどうなるかなどは構わず)やろう

と思う事を思い切つてする様子」という少々偏つた解釈の、『新明解』の理解を、ここではとりたい。わざわざよけいなことをする、そこを「果敢」と呼ぶ。

「小さな本屋」というと見えてるそのままだが、「果敢な」と形容すると見えないものが重ねられてくる。重ねあわせというと、最近「レイヤー」という言葉を好んで多用している。見えているものと見えないものの積み重ねをうまくとらえた言葉だ。「果敢」と「レイヤー」を何か関係するものとして考えたい。共通するのは過剰な熱量だろうか。

「レイヤー」は①階層・積み重ね②画層・シートを重ねる(グラフィック・ソフト)と説明される。

最近「小さな本屋」の立ち位置を分かりやすくするために『スモールハウス』(ちくま文庫)を話の枕に振っている。そのせいか気がついたらここ数カ月で五十冊ほども売れている。「オフグリッド」というキーワードが効き目だ。外部からのライフラインに依存しない独立系なのだ。この「小さな」というのも、レイヤーの一つなのだ。

ここ最近気がついたのだが、街の一角になぜか似たような小さなお店が集まっている。この似ているところにもレイヤーを読み取れる。

例えば海の世界でいうと、海面近くを泳ぐ魚、中間を

泳ぐ魚、深海を泳ぐ魚と棲み分けがある。生存競争をレイヤーで語る『植物はなぜ動かないのか』(ちくまプリマー)は、①競争型(攻め)②ストレス耐性型(受け身)③擾乱適応型(根性)と階層化する。小さな本屋は受け身なので、高山植物のようなストレス耐性型と見做せるだろう。下り坂という環境を果敢に選ぶ。

雑草の生存戦略は「争わない」とこらしい。「環境は敵ではなく味方」という気づきがそこにある。前掲書の世界観はすばらしい。安定した環境では強い植物が力を発揮する。弱い植物は、予測不可能な変化が起こる不安定な環境を選ぶ、と明快だ。

定有堂という「果敢な」というのは「ミニコミ魂」のことだ。それは何かをするために何かを準備するのでなく、いきなり「何か」をする魂のことだ。それは「しかもいい」ことを見極めるところに生じる力だ。

この「ミニコミ魂」は階層を縦断し、レイヤーを生み出す。レイヤーの二つ目の意味に注目したい。画層の説明だ。グラフィック・ソフトはシートを重ねることができる。つまり複数のシートを重ねあわせて一つのレイヤーとする。「小さな本屋」が画層のようにレイヤーを構築すると「街の本屋」になる。「街」は画層レイヤーなのだ。この折り畳んで重ねようとする熱量を「果敢」といっていいのかもしれない。変えてよいもの、変えてはいけ

ないものを身体的に明確にすると、立ち位置が単純になり、果敢な立ち姿となる。

さて果敢な本屋さんたちだが、五月二十六日（日）突然鳥取県立図書館隣りの中庭で本屋の集団に遭遇した。第2回トットリヒトハコ」と銘打った「一箱古本市」だ。個性的で果敢な店名を一つひとつ記しておきたい。「白壁書房」「ぼんだ書店」「黄砂屋」「さすらいのアリクイ」「たにひさコーヒー書販部」「SUURI」「歴史の泉書店」「県立図書館の出前図書館」「ワン・コイン」「アカゲラブックス」「吉備川辺亭」「だるぶ×くすとゆかいな仲間たち」「ぼくとBOOKS」「子ども文庫ピロッタ」「子どものお店」「Chiezo」「Books 腸感冒」「いろはに十色」「明日堂」。この壮観さに驚いた。一人ひとりが、人生の晴れ舞台と、青空の下に輝いていた。十冊ほど購入した。後で気がついたが昔持っていて、いま手元がない本ばかりだった。でも自分の存在証明を、ここで確かめるような気持ちで、買い求めた。定有堂に戻って、たまたま来店した秦阜梅林さんに一冊プレゼントしたのポール・オースターの『幽霊たち』だった。「一箱古本市」の伝道師南陀楼綾繁さんは「読書はきわめて個人的な体験です。その一方で、一箱古本市はいろんな人が一緒に本をたのしむイベントです」と語っている。

「一緒に」という言葉にも、果敢なレイヤーの一つを発見した。

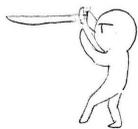
2019. 05. 27

高村友也『スモールハウス』ちくま文庫 2018

稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか』ちくまプリマー 2016

ポール・オースター『幽霊たち』新潮社 1989

南陀楼綾繁『ヒトハコ創刊号』書肆ヒトハコ 2016



一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階

# 本と人と旅と

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

あいかわらず、旅をしている。

今回の旅は京都、大阪、神戸をめぐる実家の出雲市で数日過ごし、鳥取を経由して東京に戻るという一週間だ。

ホテルに泊まるのは一日だけで、あとは夜行バスと実家泊まり。交通費と宿泊費をいかにして安く上げるとともに、トークイベントで日銭を稼ぎ、原稿料の発生する取材を入れることで、収支をトントンにすることをめざすと、自然にやることは多くなる。もつとゆっくり一か所に滞在して、名所めぐりでもするといいいのだが、そんな余裕はこの先も生まれまいだろう。

初日の朝、新幹線で京都駅に着くと、平日にもかかわらず構内は人でごった返していた。やっと見つけたコインロッカーに荷物を入れ、市営バスに乗る。席に座って、シャツの胸ポケットを探るが、さつき入れたはずのコインロッカーのレシートがどこにもない。そこに書いてある暗証番号を入れないと、開かないのだ。

約束の時間が迫っている。とりあえず、取材先に向か

うしかない。本紙にも寄稿されている鳥居貴彦さんが三月末にオープンした〈開風社 待賢ブックセンター〉に伺う。築百年の町家で暮らしながら、その一角で新刊と古本を扱う本屋を営む。小さな子どもをあやしながら語る鳥居さんの言葉には気負いはないが、「本屋でいたい」という気持ちが強く伝わってきた。

しかし、話を聞いていても、頭のどこかではロッカーの心配をしている。もし誰かがレシートを拾って、先に開けてしまったら。中に入っているパソコンを持っていかれたら、しばらく仕事ができなくなる。この日は朝から気温が高く、汗を流しながら、地下鉄の駅まで歩く。

やっと京都駅に着くが、南口に出てしまったようで、ロッカーにたどり着くまでにさらに十分かかった。最悪の想像では、荷物はもうとつくにどこかに持ち去られている。しかし、戻ってみるとまあ、そんな事態にもなっていない。管理会社に連絡して無事開けてもらえた。開錠手数料の千円が安く感じたほどだ。

予定では取材のあと、京都の本屋やギャラリーを覗くつもりだったが、このトラブルで早く京都を離れたくなつた。鳥居さんとの話に出てきた〈長谷川書店〉に行ってみよう。

JRの島本駅で降りて十分ほど歩くと、阪急・水無瀬駅に着く。駅に隣接したショッピングモールは空き店舗

が目立つ。長谷川書店は改札の目の前にあった。中に入ると、さつき別れた鳥居さんが子ども連れで、レジの前にいて驚く。用事の前に寄ったのだという。荷物が無事だったことを報告し、店長の長谷川稔さんに挨拶する。

店内をひとめぐりすると、近所のお客さんに向けて広いジャンルの品揃えをしつつ、本好きの琴線をくすぐる本も置いている。私の好きな千駄木の〈往来堂書店〉、そしてわが〈定有堂書店〉と、どこか似た雰囲気だ。

ある一角には、編集工房ノアから出た川崎彰彦さんの詩集と、宇多滋樹さんの『豚の神さま 渡慶次恒徳の半生』（宇多出版企画）が並んでいた。それを見て、この店のことを教えてくれたのが、漫画家のうらたじゅんさんであることを思い出した。うらたさんはこの店で個展を開催している。

うらたさんが川崎さんのエッセイ集にイラストを描いたことから、川崎さんの長編小説『ぼくの早稲田時代』（右文書院）を私が編集することになった。そして、その出版記念会が行なわれたのが、奈良にある川崎さんらの同人誌『黄色い潜水艦』の発行元で、宇多さんが営む古本喫茶〈ならまち文庫〉だったのだ。

うらたさんはガンで闘病されていたが、今年二月に亡くなった。長谷川さんも、うらたさんから私のことを聞いていたらしく、「やっとお会いできましたね」と云っ

てくれた。

この日の夜は、大阪・堂島の古本屋〈本は人生のおやつです!!〉で、「極私的『季刊・本とコンピュータ』の時代」と題して、私が三十代で関わった雑誌について、その執筆者でもあったジังก์堂書店の福嶋聡さんとお話した。

そして翌日には、神戸・元町の〈花森書林〉で、『漱石全集を買った日』の共著者である清水裕也さんとトークをした。まだ三十歳の清水さんは、五年ほど前に急速に古本にハマり、本書で京都〈古書善行堂〉の山本善行さんと、古本と古本屋の魅力を語っている。

大阪のトークでは二十年前の自分を振り返り、神戸のトークでは清水さんにやはり二十年前の自分を重ね合わせたりした。二十年間に、どれだけの本や本屋、人との出会いや別れがあり、何ができて何ができなかったかを考える、いい機会になった。

神戸ではトークの前に取材をひとつやり、そのあとは清水さんと一緒に古本屋めぐりをした。気がつけば、十数冊の本を買っていた。

旅をすると、本と人に出会える。そして、その出会いが私を次の旅へと誘うのだ。

# 文字数のあとがき

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

期間が十連休で浮かれている最中、私はひとり、どこにも出かけずに仕事部屋で原稿にかじりついていた。新刊の書下ろしがあったのである。

今回の書籍のコンセプトは「生き物の中学二年生」。

たとえば、コウテイペンギンの雛が可愛いこと、および成体は堂々とした体格を誇っていることは、周知の事実でもその中間の、いわば「思春期」のペンギンの姿はどのようなものか、すぐに頭に思い浮かべることができる人は少ないのではないだろうか。『動物たちの青春白書』と題したこのたびの新刊は、そうした生き物たちの「中学二年生」時代のビジュアルや生態に迫ることをテーマとしており、四〇種類の動物たちの青春物語をそこに書き連ねた。監修は鳥取環境大学の教授にして動物行動学者の小林朋道先生。生き物を愛好するすべての読者の方に、自信をもってお届けできる一冊である。

それにしても、今回は入稿ギリギリまでPCの前に座っていた。いままでよりも、原稿がスピード感を伴って進まなかったのである。ネタもプロットも揃っている。小林先生のアシストも完璧。なのに、一本一本の原稿に時間がかかってしまう。これはなぜなのか。

おそらくだが、「文字数」が関係しているのだ。

今回、それぞれの動物に対して、一本「千文字」の指定が入っていた。それ以上オーバーすれば、文字がはみ出してしまうわけだ。これが曲者で、実は私、「千文字」で原稿を仕上げることが苦手としている。「千二百文字」、つまり原稿用紙三枚分であれば私はそこにきっちりと言葉を敷き詰める自信があるのだが、これが二百文字削られただけで途端にうろたえてしまうのである。

ただ、不思議なもので、私は「千二百文字」と同様に、「八百文字」も愛好している。つまり、「指定文字数が少ない＝苦手」というわけではないのだ。「四百文字」もけっこう好きだし、「二千文字」の使い方もよく知っている。逆に「千文字」の座りの悪さに似ているのは、「六百文字」とか「千七百文字（まさにこの音信不通の指定原稿文字数である）」だ。

これはもちろん私個人の話なので、人によっては「千文字」を一番得意とするタイプもいるだろうし、「八百文字」とはなるべくお近づきになりたくない、なんて書

き手もいるだろう。ゴルフを嗜む人たちは「このホールは、パーいくつでまわれる？」なんて会話をするらしいが、作家を集めて「このテーマだったら指定文字数いくつで書きたい？」などと情報交換するのも、なかなか面白そうだ。それぞれが確実に得意な文字数と苦手な文字数を持つているはずである。

与えられた文字数に寸分の狂いもなく言葉を収めることができると、ある種の快感が走る。それは、あらかじめ準備した惣菜をお弁当箱にきっちり詰めることができた時に得られる喜びに似ているな、と思う。あの時にしか得られない快感があるから、自分は物を書き続けているのかもしれない、なんて思うこともある。

さて。出版まわりの状況は、ここ数年で大きく変化してきた。今年に入り、私が新たに始めた連載は、どれもWEB上のものばかり。紙での連載は、わずかなものとなってしまった。

WEB連載での文字数の指定は、かなりゆるい。「だいたい四千文字で」と言われたものに対して、「六千文字」で納品しても、特に問題はない。だからつい、書きすぎてしまったりする。紙のきっちりとしたお弁当箱に對して、WEB原稿は満腹になるまで続けていい流しそうめん、といった按配である。お弁当箱も流しそうめんも、それぞれに異なる「書く喜び」があるわけだが、W

EBに慣れてくると筆致や文体の癖も変わってくるのだろうな、とは思っている。いまはまだ、令和の時代に自身がどんなものを書いていくのか、未知なる境遇を楽しんでいる最中である。

さて、ここまで書いて、「千七百文字」にはあと百文字ほど。お知らせをして、お茶を濁そうと思う。

### 【お知らせ】

新刊『動物たちの青春白書』（柘出版社）が発売となりました。どうぞよろしくお願いいたします。

それからWEBでやっている『エクソダス・フロム・イシヨクジュー』という連載も、是非読んでいただきす。

これできっちり、「千七百文字」！



## 品川区大井町の「ベンセレーモス・ビル」って何だ？

萩原 俊郎

(新日本海新聞社 東京支社長)

長つたらしい題名だが、今回は南米チリの音楽の話。

かつて弊紙の一面コラム「海潮音」に、こんなことを書いた。

「『9・11』というのは何か不思議な磁場、吸引力のある日なのかも知れない。衆院選(※注・あの小泉首相の郵政解散選挙) 投票票日と四年前の米同時多発テロの日が重なり、警備陣もピリピリしているが、実は歴史に埋もれかけたもう一つの『9・11』がある◆先週、友人が夜の弥生町にフランス人の親子を連れてきた。自分の会社を売って、のんびり日本を旅しているという。息子の母親(妻ではない)はブラジル人で、南米通だ。片言で『チリで起きた9・11、ご存じですか』と聞くと『ウイ、CIAによるクーデターだったね』。こちらと同世代の父親は『もちろん』という顔でうなずいた◆一九七三年のこの日、米中央情報局(CIA)の支援を

受けたピノチエト將軍は、南米初の自由選挙で生まれたアジェンデ社会主義政権を転覆。弾圧の恐怖は五木寛之の小説『戒厳令の夜』に詳しい。將軍の独裁下、行方不明になった市民は数千人といわれる◆多分、米国人は自国の権益と市場を守るために犯した『9・11』の方は、もう忘れているだろう。『チリもようやく平和になったが…』。自称・恋多きフランス人のパパは言う。『米国人は何でもマネー、マネー、マネー。人生の楽しみ方を知らないね、全く』。かの国の米国嫌いはやはり本当らしい…。



クーデターの直後、首都サンチャゴの競技場に連行された国民的人気歌手のビクトル・ハラは、人々を励ますうと大統領選のキャンペーンソングでもあった「ベンセレーモス(我々は勝利する)」を歌ったが、ギターが二度と弾けないように両手を撃ち抜かれた末、殺されてしまう。

当時、私は南米の民族音楽フォルクローレになぜか魅かれ、吹けもしないケーナ(竹笛)を通販で買っていた。妙な高校生だった。支援といっても、岡山に来演したチリの亡命フォルクローレ・グループ「インティ・イリマニ」のコンサートに行き、レコードを買ってあげるのが精いっぱい。レコードで覚えた「ベンセレーモス」をク

ラスメートと歌ったりもした。思えば、青臭かったねえ。何も左翼かぶれというわけではなく、今の世の中でこのように人が踏みにじられていいのか、という心の痛みや怒り。それは、あのステイキングも同じだった(後述)。大人になって、ラテン歌手の八木啓代さんが書いた『禁じられた歌ービクトル・ハラはなぜ死んだか』(晶文社)を読んだ。たまたま八木さんのサイトを見つけ「いい本でした」と書き込みをしたところ、東京から同世代の思わぬ反応があった。

◇ ◇ ◇  
「僕も高校生でした。その日は朝から教室で興奮気味でした」。品川区でワイン店主をしている男性だった。

続いてこう書かれていた。「店がある自社ビルを『ベンセレーモス』と命名しました」。エーツ、それはすごい、とその時は驚いたが、やがて忘れてしまった。東京に着任してからふと思ひ出し、建物情報サイトを探すと…本当にあるのだ！ 大井町に「ベンセレーモス・ビル」が。コンクリート打ちっ放しのお洒落なデザインナーズ・マンション。「どうせなら、ここに入りたかったな」。住人になれば久しぶりに「ベンセレーモス」が彼と歌えるのに(笑)。だがワイン屋はなく、コンビニになっていた。

大昔に買ったステイキングのアルバム「ナッシング・ライク・ザ・サン」(1987年)に「孤独なダンス」(They dance alone=Cueca Solo)という曲がある。Cueca(クエッカ)はチリの伝統的な踊り。軍事政権下で消息を絶った息子の帰りを待つ母親たちを歌ったものだ。

やがて独裁者ピノチエトは失脚し、人権侵害の罪で国際的な非難にさらされる。90年、ステイキングはアムネステイのコンサートでチリを訪れた。行方不明者の写真を掲げた母親たちをステージに上げ、この曲を歌っている(ユーチューブで観ると、インティ・イリマニがなんとジェネシスのピーター・ガブリエルと一緒に歌っている！)

虐殺のあった競技場は「ビクトル・ハラ・スタジアム」になり、アジェンデと同じ社会党員で初の女性大統領も誕生。チリは今、南米で有数の豊かで安全な国になっている。「ベンセレーモス！」 チリ・ワインも美味いしね。

ところで検索で「ベンセレーモス」と打つと、今やチリよりも大井町のマンション情報が数で圧倒しているのが何とも(笑)。彼は元気なのだろうか。

◇ ◇ ◇  
次回もラテン音楽 四ツ谷とボサノバの話です。

## 湖山↓出町柳↓吉祥寺 転勤族の家探し

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

「音信不通」へのお誘いがあつたのは、東京への転勤が決まった直後の四月。記者として鳥取総局に勤務していた5年前、「音信不通」が創刊された時期に、鳥取から大阪本社へ転勤した。今回のお誘いで、その後の音信不通が途絶えたことに驚き、縁を感じて書かせていただくことになった。

鳥取に転勤した際、住んだのは湖山池の近くだった。記者は事件・事故などの急な招集に対応せねばならないので、職場の近くに住むのが普通。しかし、湖岸にある芝生の「グリーンフィールド」で子どもたちがのびのびとサッカーボールを追いかけるのを見て、近く

の手頃な一軒家を借りた。現在高一の長男、中二の次男はこのグラウンドで本格的にサッカーを始めた。動物が大好きな小5の長女は、散歩に来る人たちが連れてくる賢そうな犬たちと、毎日のように戯れていた。編集者として大阪本社に転勤した際、選んだのが京都の出町柳だった。定有堂に並んでいた京都の書店員の本がきっかけだ。鴨川と高野川が合流する「鴨川デルタ」が、「都会でも田舎でもない京都人の憩いの場」と紹介されていて興味を持った。新人生歓迎で飲み会を楽しむ大学生、夏日に水着姿で遊ぶ園児たち、周辺の紅葉と合わせて楽しむ観光客……よっぽど寒い時期を除き、一年中多くの人が集まってくる不思議な場所だ。

鳥取で出会った、京大出身の取材先の話も参考にした。学生時代、大阪・淀屋橋から京阪電車を通い、乗車中は読書三昧だったという。私はまさにその逆、始発の出町柳から終点の淀屋橋へ通勤し、読書と居眠りを満喫したこの四年半だった。

そして今回、東京の記事のデータベース編集をする部署に異動になった私が選んだのが、吉祥寺だ。保育園で働く妻や子どもたちは当然残り、単身赴任だ。東京で生活するのは16年ぶり。学生の時や入社前に、井の頭公園に良く遊びにいった。週末にフリーマーケット

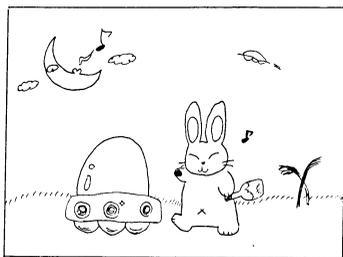
トで買い物をしたり、大道芸を楽しんだりと、特に目的はなかったが足が向いた。

良く休憩したのが、公園入り口にあるスターバックス。私は、ほとんどスタバには入らないが、このスタバは好きなのだ。公園に向かって歩く人たちを、ただただ眺める。家族や恋人、学生らがゆっくり歩いていく。時には互いの顔を見て話しながら、自然と歩幅も狭くなる。朝の吉祥寺駅周辺で突進するように歩くサラリーマン（私もその一人）とは対照的だ。

何が言いたいかというと、通勤族という制約がある中で、人が自然と集まり、リラックスできるような場所の近くに自分は住みたいと思うことだ。職場には少々遠くても、そんな人たちの姿や表情を見ることが、自分も癒やされ、自分の中の「バランス」を保てるような気がするからだ。人脈を生かして情報収集はするが、やっぱり「ここに住みたい」という直感に勝るものはない。

仕事帰りに、やっと今回の原稿を書き始めたのも、このスタバだった。締め切りが目前にならないと動かない自分は、二十年前の学生の時とまったく変わらなず、成長していないなと思う。そのとき夢見たことは、夢で終わりそうなのがほとんどだ。でも、良かったと思うこともいくつもある。納得できるような記事を何

度か書けたこと。家族が出来たこと。子どもが自分よりサッカーがうまくなったこと。そんなことを考えながら、公園に向かう人たちの姿をまた見ている。



# 『おっさんとプリンディー さくらば昭和や』

劇団青春座 … 五月の観劇

五島 朋子

(鳥取大学地域学部附属  
芸術文化センター)

福岡県北九州市で活動する劇団青春座は、創設1945年10月。戦争の傷跡生々しい八幡(現北九州市)で、若者たち数人が集まって始まったという。創設以来、演劇上演は途絶えることなく現在まで続いていると知り驚嘆した。323回目の公演という2019年5月の上演に足を運んだ。

会場は、2003年に開場した北九州市の公立ホール・北九州芸術劇場だ。新幹線が止まる小倉駅から徒歩15分。紫川のほとり、北九州市役所や小倉城に隣接し、街のシンボリックな場所に立つが、再開発事業で建設されたので、劇場は、複合商業施設の一画にある。2003年、私は北九州の劇団で制作を務めていた。新築劇場の試運転期

間に、劇団で上演をした経験がある。懐かしい場所だ。

当日は、自由席だったので開場より10分ほど早く劇場入り口に向いたが、すでに長蛇の列ができていた。会場の中劇場は、1、2階席合わせて約800人が入る。

2階席は使われていないようだったが、それでも開演間際には、1階席は9割程度埋まっていた。5月18日、19日の2日間で合わせて3回上演されるから1、500人程度の観客を集めることになる。地方都市のアマチュア劇団としては、相当な集客力だ。

さて、肝心の舞台は。とある喫茶店の常連客が、何か人のためになることをやってみよう！と意気投合。1時間1000円で悩み相談や労力を提供する、というおっさんレンタル「貸しまし業」を始める。メンバーは、昭和生まれの元市役所職員、個人タクシー運転手、床屋、喫茶店のマスターの4人。サラ金の取り立てに追われる若い夫婦、スリ常習の若い娘、観光案内相談などの他に、おっさんたちそれぞれの家族と人生のエピソードを絡めながら、舞台は進んでいく。途中には小倉祇園太鼓の稽古風景が、そして大団円には祇園祭が賑やかに登場する。江戸時代初期にはじまったという小倉祇園太鼓は、2019年に400周年を迎え、ちょうど3月に国の重要無形民俗文化財に指定されたところだそう。ご当地色たっぷりの舞台だが、ストーリーは、おっさんたちを中心に

小さなエピソードを組み合わせながら進んでいき、大きな展開や驚きはなく平板だ。誰かの物語にフォーカスするのではなく、市井の人々の暮らしの凸凹を分かりやすく描いている、とも言えるが、脚本はちよつと物足りな

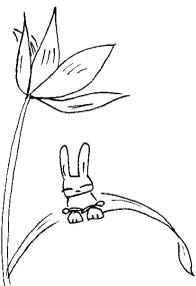
い。

活動歴が70年を超えることから、出演者の年齢層は高齢者から小学生まで幅広い。ほんのワンシーンしか登場しない役も多く、パンフレットで確認したところ、総勢35名がキャストとして舞台上がっている。更に小倉祇園太鼓保存振興会（古船場町内会）が特別出演しているので、多くの観客動員につながっているのだろう。

カーテンコールでは、職場の同僚やよく知った友達が出演しているのか、客席から大きな声がかかり、広い客席ながら親密な雰囲気だった。また、1974年から劇団代表を務める井生定巳さん（1940年生まれ）が、愛嬌たつぷりに舞台上に登場。小倉祇園太鼓の文化財指定を記念した手ぬぐいが当たる抽選会が行われ、会場はちよつとした熱気に包まれた。私は残念ながら外れたけれど。井生さんは、早稲田大学在学中に演劇に出会い、卒業後帰郷し、兄が入っていた青春座に入団、現在まで活動を続けている。演出を担当することもあるが、現在はもっぱらプロデューサーや若い人の指導をされているようだ。北九州芸術劇場の整備については、井生さんが「文

化拠点」が必要だと、議会や市長に強く働きかけた経緯があるということも、劇場関係者が話してくれた。来年、青春座は創立75周年を迎える。演劇活動の継続が、北九州市の現在の演劇文化に与えた影響には大きなものがあるのだろう。

青春座の次回公演は8月10、11日。北九州芸術劇場の今度は小ホールで、ギリシア悲劇『オイディプス』を上演するという。精力的な活動ぶりに、改めて感嘆する。また、北九州を素材にしたご当地作品と、古典戯曲という振り幅にも興味をそそられる。そして、この振り幅が、長年にわたる継続を可能にした理由の一つなのかもしれない。



# なにやっつてんだ

鳥居 貴彦

(開風社待賢フックセンター)

三月二八日。開店前夜。本が並んだ。お釣りとレジ袋も準備した。看板も一応、ある。床がきたない。明日掃除しよう。あととはなんだ。わからない。

ストープに手をかざしながらなんとなく売り場に座っている。本棚を見上げる。よく分からない雑多な並び。誰が並べたんやろか。本のことよくわからないやつがやっつたに決まってる。

棚から本を抜き始める。『カンガルー・ノート』『いかもの食い』『ふだん着のブティックができた』。うさこちゃんシリーズは『うさこちゃんのたんじょうび』にしよう。『しゃれた言葉』もある。本が傾く。あんまり気にしない。どんどん抜く。『タバコの歴史』『インドでわしも考えた』『けむりの居場所』『ん』まである。『棚の前を行ったり来たりする。探してる本がある。見つからない。二階に山積みにもされた在庫をひっくり返す。』

『ブラフマンの埋葬』『つまずきやすい日本語』『くりかえすけど』。少し疲れてきた。『たちの悪い話』がみつかった。『一千一秒物語』がどっかにあったはず。あと2冊。ない。本棚は誰かがたくさん買っていたあとのようになつた。いろんなところが抜け落ちている。うーん。むりか。諦めて寝よう。階段を上がろうとしたとき、『せんはうたう』がこちらを見上げていた。あ、そろつた。声が出た。なんの意味もない、ジャンルもばらばらな本が二冊ならぶ。頭文字をつないでいく。

カ、い、ふ、う、しゃ、タ、イ、け、ん、ブ、つ、く、せん、た、ー。

なにかができた。ひっかかっていたのはこんなことじゃない。なにやっつてんだ。でもいいや。寝よ。

翌朝九時、ほうきで外を掃いていると道路の向かいにおじいさんが立っている。なんとなく行ったり来たりしながらたまに目がある。まさか、お客さん？ 開店前から？ そんなことはないだろう。とおもっていたらおじいさんの孫を乗せた車がやってきました。途端に笑顔になるおじいさん。家族は隣のマンションに入っていく。静かに十時がやってきた。

郵便が届く。「花屋さんが場所探したはりましたよ」と配達の人。しばらくして知らないおじいさんが大きなス

チールの土台を組み立て始めた。「どうしました?」「花屋です」「おおきいの?」「そやねえ」。ほんとに大きな花がきた。土台は持つて帰つてもらうことにする。

その後も花がとどく。

店の前にタクシーがとまる。塩出さんが降りてきた。

最初のお客さん。花をもっている。わー。

窓際が花であふれた頃、店内は人でいっぱいになった。知ってる人、知らない人、みんながこちらに背をむけて本をみている。なんかへんな光景。ちよつとおもしろくなってくる。

ないものばかりが気になる。レジスターない。ショツプカードない。BGMない。買わずに出て行く人も気になる。どうして買わなかったんだろう。もうこないだろうか。どこから来たんだろう。なにかを期待して? たまたま通りかかっただけ?

最近店を開けようとしている人たちの顔が思い浮かぶ。あの人ならどんな本をいれただろうか。どんなならびにするだろうか。どんな顔で店に立つのだろうか。自分にはない物語を想像する。いま自分にはないけれどあったかもしれない話。できたかもしれない店。

「開いてるっていいな」とおもう。これまでは会いに行く仕事だった。約束をして、スケジュールをたてて、そ

の人めがけて、いく。会えないときもある。会えた人とはそれなりにたのしく話したり新しいことを教えてもらったりする。それ以上のことは、あんまり起こらない。いま、お店を開けてここにすわっていると思いもかけない人がやってくる。懐かしい人、お世話になった人、知らない人。誰かに聞いてきた人もいる。ネットで見たんです、という人もいる。朗読をやってるんですという人がやってくる。本買ってもらえるんですか? という人もくる。もう本はすべてここで買うようにします、という宣言をする人もいた。くじ引きと読み聞かせを組み合わせたことをやらせてくださいというよくわからない人もくる。

開いていると、よくわからないことが起こる。自分ではできなかったこと、自分の想像もなかったことがやってくる。そこにいるのはもう「自分」ではない。じゃあだれだ。「店の人」か。

そうやっていつのまにか、店は開いていた。一日が、あつという間に終わった。

ン

「開風社 待賢ブックセンター」 2019.03.29 オープ

京都市上京区大宮通樺木町上る菱屋町818

# くらし・道具・記憶

結川 真悟

(生活者見習い)

縁あって、この春は「鳥取の民藝」にまつわる取材の機会に恵まれた。

その中で、県内でも指折りの知名度を誇り、全国的にも「鳥取民藝の顔」となっている窯を訪ねた。以前からその窯のデザインには惹かれるものがあり（作品に用いられている色、そのどれもが好みで、アウターは緑、インナーは白、ボトムスは黒、なんて服装を定番化したい気持ちすらある）、これを機会にひとつ作品を買って帰ろうと決意した。

決意したはいいものの、自分にとって決して安い買い物ではない（もちろん、いずれの作品もいいものだという認識はあり、決して高い買い物ではないのだが）。そこで、取材に応じてくれた窯のご主人を前に、ギャラリーをあれだ、これだと言ったり来たり。今日買うのはひとつだけ、と思うと余計に力が入り、少しでも興味がある作品を手にとっては「これはどんな用途に使えますか？」と質問を繰り返す。

すると、柔らかな表情が刻まれたご主人からは、「どのように使うかを考えるのも、民藝の楽しみ方じゃないですか」

との一言が。

作り手のもとを離れた作品は、受け手のくらしに取り込まれて、どのようにでも完成していくのだろう。とても自由だ。

二度目に鳥取に戻ってきたとき、自分のくらしを見つめ直したいと、いくつかの新しい習慣を取り入れようとした。最も大きな変化が、なるべく毎日、手帳にその日の行動記録と日記のような文章を書き留めるようになったことだ。

もともとのねらいは、心身ともに乱れていたくらしを可視化し、言語化し、振り返るため。一日一ページある手帳の左側には、「八時、起床。十時二五分、出社。……」など、その日の出来事を淡々と記す。右側には、ここには書けないような思いも含めて、その出来事で感じたことなどを記す。

この習慣を得てから、時間には限りがあること、それを理屈ではわかかっていても、結構時間の無駄遣いは起きていること、一日の中で自分の感情は意外と起伏に富んでいること、「何もない一日」なんてほとんどないこと、色々なことを少しずつではあるが感じるようになった。

例えば、新時代の幕開けと、もしくは純粋に休日を運んできたため世間に祝福された（またある人は、恨んだりもしているかもしれない）水曜日と、この原稿を書いている水曜日は等しく同じ一日であり、世間の誰かにとっては先の水曜日よりも大切な一日になっているであろうことに想像を巡らせることができるようになった。

また、散らかりがちだった自分の部屋を、自分史上最も片付けた。持ち物は厳選。いま、服や道具を買うときの決め手となる尺度のひとつに、「これを十年愛せるだろうか」という問いを付け加えている。もちろん、初志貫徹できるものばかりではないだろうが、少なくとも買うときは、自分のくらしに調和するか、真剣に悩むようになった。

そして、気付く。

いま、日々のくらしに向き合おうとする原動力は、過去の自分を変えたいという思いなのだが、過去の自分がどうくらししていたか、その記憶がほとんどないのだ。

おそらく、コンビニ弁当やインスタント食品ばかりを食べていたのだろう。アイロンがけを面倒に思っ、考えなしにシャツを買い足していたのだろう。明日も仕事だと思いと辛い日は、朝が来るのを嫌がってテレビを垂れ流していたのだろう。でも、その生活のディテールが思い出せないのだ。

鳥取生活もあとわずか。そう思うと、そんな記憶に残ら

ない日々があったことが、とてももったいなく思えてくる。過去は変えられないから、これからは、些細なことでも面白がって、鳥取でくらしたい。

そんなとき、手帳や服、器など、真剣に向き合った結果そばにいてくれる道具があれば、くらしの記憶をつむぐ手がかりになるのではないかと感じている。

ある窯元から持ち帰ったのは、おそらく飲み物を入れるカップ。自炊もしない自分にとって、味噌汁やスープを注ぐことはない。毎日のように飲むのは、野菜ジュース。しかし、カップの内側に配された白色に、紫やオレンジが沈着しそうなのがどこかもったいなく、注ぐのがためらわれる。最終的には、取材を終えた安堵感と、このカップを買えたことを祝して、ちよつとだけ高いビールを初めて注ぐ飲み物に選んだ。

後日、窯のご主人にこのことを報告すると、「そうですか。あれは焼酎カップを作りたい、と思っできた器なんですよ。だから、似ていますね」と教えてくれた。

この答え合わせ、少しでも相手のことを知りたい、理解したい、と思っ出会った人の考えに近かったことは嬉しい。しかし、予想外の答えを提示できなかったのが、少し悔しくもある。今度何かを買うときは、その日までのくらしを懸けて、自分なりの答えを導いて驚かせたいものだ。

# 神の都の現状

芝野 浩貴

(地球探検家)

臨床美術という言葉がある。臨床心理は河合隼雄氏が、臨床哲学は鷺田清一氏が提唱し、今では世間に認知されているが、臨床美術士はまだ国内・県内でも資格者は少ない。絵を描いたりオブジェを作ったりすると脳の機能が活性化されるから、創作活動が認知症ケアに役立つのではないかという発想から生まれた。対象も高齢者以外に広がりつつある。今年2月の地元の新聞で記事が掲載されたので、臨床美術の資格を持つ教え子と連絡も取ってみたが、最初にその言葉を教えてくれたのは南半球の島を巡る船で知り合った大谷女子短大のA先生だった。短大で臨床美術を教えて、オフの2月はタイにマンシリーマンションを借りて滞在するという生活を繰り返してる人だった。

東京でのプロボノを終え、沖縄プロボノまでの移動のついでにバンコクのドーン・ムアン空港で降りた。臨床美術の概念同様、自分の感覚を研ぎ澄ますために地球を移動してるわけだから、予備知識のないまま身体の声に従って行動した。南に向か

うバスに乗り込み、かつての日本のように車内に料金徴収係の人が同乗してるので30バツ払い、MRT(地下鉄)のあるモーターで降りてもらい、マツカサンと交差するペッチャブリーという駅で降り、宿のありそうな西へ向かってあとはひたすら歩く。看板を見るとSOI〇〇と数字が続くが、路地の番号で奇数側と偶数側に分かれる。(大通りはタノンと言い、タノンからソイは伸びる路地例えば通りに向かって左側が奇数なら右側は偶数のソイになるが、通りをずらせば左側偶数で右が奇数と反対になる。王宮に近いほど数字が小さくなるのに気がついたのはかなり後で、碁盤目状ではないから何度か方向を間違えた。信号もはっきりしないところもあり、左右を見て今赤か青かを判断することがしばしばあるが、車やバイクは容赦なく走るので油断すると轢かれる。セーンセープ運河に沿って歩く。タイを水都と成したチャオプラヤー川に繋がる運河の一つ。車、トゥクトゥク、バイク、タクシー、バスだけでなく船上輸送も他の国とは違う交通インフラで、その全てが飛び交うプラトウ(門)ナム(水)市場とセントラルワールドの間に宿をとる。ラーチャダム通りから、ロコ(地下鉄)のハブであるサヤムまでのスカイウォークは、バンコクが二千年代に入ってから常に成長し続けている理由を一瞥できるルートで、国際色豊かな豪華ショッピングモールを成す。(インドネシアは宗教上の理由、ラオスやベトナムは共産圏の縛りがありインフラが進まず、タイが安定した進出先町に着いたらまず高いところを目指せよ)宮

本常一)に従い、バムルムアン通りを歩いて、ワット・スラケート(ゴルデンマウンテン)に登る。仏塔内には、月曜から日曜までのそれぞれの曜日の象徴である像が飾つてある。スラケートを下りるとソイ・バーン・バートから僧侶が托鉢で使う金属の鉢を作る人が出す音が聞こえる。磨く人・折り曲げる人・叩く人と若者が分業していた。それを裏付けるように見たことのない仏具通りが続く。大きな金の仏像が店狭しと並ぶ。ワット・プラケオのエメラルドの仏像、8基の仏塔「白仏陀、紺仏法、桃僧、緑尼僧、紫仏陀、青国王、赤観音菩薩、黄弥勒菩薩を表す」、回廊(ラーマキエンの話)の壁画、王宮を周り、ワット・ポー(寝釈迦仏)へ移動。寝釈迦仏の足の裏の108の螺鈿細工に象徴されるように、タイ仏教といえど、バラモン教がベースにある。ター・チャーンから渡し船でワット・アルン(暁の寺)に着く。この紀行の目的でもある。バラモンがもつと民衆化したヒンズー教由来の飾り付けがタイの仏塔には多く見られる。ワット・アルンはシヴァ神の住む聖地のカイラーサ山をモデルにしている。三島由紀夫の『暁の寺』は、バンコクの名前の由来が橄欖樹(コーク)の町(バーン)であることから始まる。(クルンは都、テーブは神ということ)で神の都という意味でタイの人はバンコクでなくクルンテーブを使う)タイでは生後3ヶ月はまだ人間でなく精霊の子。名前は精霊にさらわれないように、牛や豚などの呼び名で呼ぶ。南上座仏教だから修行し、出家した僧侶のみが救われるといっても、主体は国家で僧侶は役割。王への不敬罪は厳しい。(シヴァ神のニツ

クネームでプロボノする私は不敬となるのか…)転生の小説の舞台『暁の寺』を離れ、ヤオワラート通りを歩く。ここは、チャイナタウンで金を商う店が並ぶ。地区によって特定の外国人が集う場所があり、例えばスクムウィット通りには、アラブ人、インド人、韓国人、日本人街がある。北と東西は共產主義国、南はイスラム国家に囲まれながら、アメリカ自由主義陣営の前線基地でもあり、元々英仏の緩衝国として戦下を逃れてきたタイは食事の味付けもチャンプルー。食事はフードコートで済ませたが、レストランや屋台同様、テーブルには粉末とうがらし(辛)、酢漬けとうがらし(酸)、ナムプラー(塩)、砂糖(甘)の4種類の調味料が用意されてて、自分好みの味に調整する。

タイを離れる日はワンデイパスを140バツで購入し、BTSを全線乗り、空中から街を俯瞰した。子供・妊婦などの弱者に優しく、わずかな間に高齢者や盲人に席を譲る国民を何度目にした。総選挙前であつたが、赤のタクシン派(農業従事者支持)と黄色の反タクシン派(中間層や役人支持)がぶつかる様子も存在も目にはなかつた。タイ人は誰もがスマホを持ち、失業率ゼロ。店番する人も車内の人もほぼ全員がスマホをついている。農家の子供達がバンコクに来て出稼ぎで両親を養っている。パユタイで乗り換えエアポートエクスプレス(30分45バツ)でスワンナプーム空港へ向かい、タイ米にお世話になつてる泡盛の国那覇へ飛んだ。

# 鯉魚(翻) (こいはやさしきかせこのり)

ムラカミヒロシ

(フライング・ブックマン)

今月七日は端午の節句。

夏日、真夏日続きで、菖蒲や蓬による暑気払いや厄除けも俄かに相応しい季節となった。

節句自体は、奈良時代に遡るそうだが、シンボルともいえる鯉幟を上げるようになったのは、かなり時代が下つてからのことであるそう。

天保年間の『東都歳時記』の五月五日の項に、「紙にて鯉の形をつくり、竹の先につけて幟とともに立つる」「近世のならはしなり」とある。付された挿絵には、家紋入りの旗指物や、鍾馗様の幟や、吹き流しに交じって鯉一尾がぶら下がった幟が描かれている。吹き流しの竿には、竿頭に籠玉と矢車が見える。

初代広重の『名所江戸百景』にも、よく知られた絵が

ある。どこかい真鯉が画面一杯に身を躍らせている大胆な構図の「水道橋駿河台」である。遙か駿台下の方にも、屋根の間に間に、鯉や旗や鍾馗様や、吹き流しが翻々と翻っている。こちらは安政年間の上梓である。

くどくも書いたとおり、どの竿も真鯉一匹だけである。どころか、吹き流しも一本の竿で独立している。本来の用途を考えれば、それが正式であることは論を俟たない。空港や気象台に立っている吹き流しは一流(りゅう)である。何時頃から、複数の鯉が泳ぐようになったのか。

明治半ば頃の錦絵には、まだ真鯉のみの風景が見られる。しかし、末頃になると、緋鯉があり、吹き流しも併せて一本の竿に揚げ、竿頭には籠玉が載るといふ、現在の形に近い写真が現れる。

緋鯉の謂われは明確ではないが、昭和初めの唱歌「こいのぼり」(近藤宮子・作詞)では、真鯉はお父さん、緋鯉は子どもたちと歌われている。この時代が長く続き、筆者の子ども時代も二匹であったが、早くも昭和三十年代半ばには、青、緑、橙を加えた五色の鯉のぼりが発売されている。たまたま時期と色合いが近かったため、東京オリンピックにちなんだ、という俗説もあるらしいが、実際は、単に「清潔」「健康」「闘志」を表したものと

いい、五輪とは無関係。家族の属性も付与されていない。今では、紫や桃色もあるというから、もう、何が何やらである。

現実の鯉は、白、黒、赤と金銀が主で、稀に青や黄があるらしい。何れ遺伝子操作で、熱帯魚のDNAを加え、五色、七色の鯉が出現するかも知れない。

金色の鯉で思い出されるのは、ドビュッシーの名曲だが、あれも日本の蒔絵の盆（南洲・画）から想起されたものであることは有名だ。

上田秋成の『雨月物語』の一編「夢応の鯉魚」は本朝幻想文学の白眉である。

常より、魚となって水中に遊ぶ夢を見ては絵に描いていた画僧は、放生の心掛けにも篤かったが、病になり、仮死となった間（あわい）に、心は身を離れ、水辺にフラフラとやって来る。熱に火照った体を涼し気な水に沈め、魚の如くに泳ぎたいと願うと、平素の功德を多として、水神より金鯉の衣を送られ、魚となって自由に水中を逍遙することを得た。

後は省略するが、この話、元ネタがあつて、明代の『醒

世恒言』（馮夢龍）中の一編「薛録事魚服証仙」に拠っている。もつとも、「薛録事」自体、唐代の『統玄怪録』（李復言）の「薛偉」に取材したものだから、剽窃の盗用とも言っても野暮だろう。芥川龍之介が『続玄怪録』に基づいて「杜子春」を書き、『今昔物語』から「羅生門」や「鼻」を書いたようなものである。

荘子には、百瀬の滝の鯉よりもつと豪快な魚のエピソードがある。「逍遙遊篇」冒頭のお話である。

北冥に魚あり。その名を鯢（こん）という。大きさは幾千里とも知れぬ。化して鳥となり、その名を鵬（ほう）という。鵬は台風に乗って南冥に飛翔する。飛び立つとき、波は三千里に及び、舞い上がるや九万里の高みに達する。

一里を仮に五百メートルとすれば、四・五万キロ。ほぼ地球の円周に当たる。成層圏の上限がせいぜい五十キロ、月までの距離が三十八万キロだから、どう控え目に見ても、宇宙規模の大鳥といつてよからう。暗黒怪獣バキューモンも驚倒（びっくり）といったものである。

## 坪井日記 ⑱

齊藤仁昭

(長崎書店)

ている。いいことばかりじゃないか!と前向きに今は捉えている。

ところでお客様はスリップを見たりするのだろうか。もし見ているとすれば、スリップにいろいろとコメントを書くのもありんじゃないだろうか。本を開けると出てくるコメントは私信のようで楽しそう。どうだろうか。

5月某日

東京都中央区八丁堀駅の近くの七針というライブハウスにてライブ。七針はいい所だと聞いていたが、DIYの行き届いたいい店だった。MIMI(ミーマイモー)さんというミュージシャンが、自分の「ハト」というバンドのイベントに「inochi(イノチ)」という仙台のバンドを呼んだからケバブジョンソンにも出演してほしいとのことでお呼ばれ。人のことは言えないけれど二組ともすごい名前だなと思う。鳩と命に挟まれて二番目に演奏した。

MIMIさんが喜んでいたのでいい演奏ができたのかもしれない。ハトとinochiの演奏も面白かった。今更だけれど音楽の感想を言う語彙がない。inochiは日常の出来事をテーマにした静かなキングクリムゾンのよう。これで伝わるだろうか。映画や本のことでも伝える語彙がない。本を語る語彙がないのは致命的なのでは。POPを書く

5月某日

すっかり心を入れ替えて、手書きのスリップを丹念に書き、スリップレスの書籍に差し込んである。近隣の古書店の店主が一冊一冊をとっても丁寧にクリーニングし、値段をつけている様を見るにつけ自身の雑な仕事を恥じ入った次第です。スリップを書くことで書誌情報がこれまでより頭に入るし、ひと手間かけている分、品出しに気持ちが入るようになった気がする。偉そうに文句ばかり言っすみませんでした。初心に戻って仕事に励みます。スリップ作成の手間を考えると雑な仕入れは仕事が増えるだけなので、仕入れ作業も以前よりシビアに行っ

のがいまだに苦手です。いいか悪いかはわかるのだけれど…ライブ後は店長のDJで皆踊る。

5月某日

子と妻がEテレで『おさるのジョージ』を観ていたので僕も初めて観た。サルがしゃべってコナン君みたいに事件を解決する子どもだましな話だと勝手に決めつけていたのだが、まったく違う話だった。面白かった！原題は『Curious George』とけっこういい。黒田硫黄の短編「ミシ」に出てくる珍妙な生き物“ミシ”の「好奇心を失ったらおしまいだミシ」という台詞を思い出した。大いに子どもの（おとなも）好奇心を誘ってくれるつもりだった。原作である「ひとまねこざる」シリーズを一度も読んでないことなので読んでみようと思います。

『おさるのジョージ』が土曜の八時三十分からの放送で、九時からはNHKFMでゴンチチのラジオ『世界の快適音楽セレクション』を聴いた。聴けるものなら毎週聴きたいが土曜に休めることはあまりないので久しぶりに聴けた。いい曲ばかり掛かる。尖った曲も掛かる。今回はシルバーアップルズやラストポエッツまで掛かっていた。土曜出勤の時はこれをお店で流したいな。一九九九年から放送しているロングラン。続いてほしい番組です。

\*

あの子は何点 僕なら満点  
むせ返るは 目の前では満点  
道行く子猫が 思わずバク転  
振り返るわ この夏一番です

歌の始まりだ  
待ちわびて Hello 疎まれて去ろう  
澁瀬の街中で

風のまにまに バタバタ公園  
絡まったら 絡まったらマンデー  
気分は弁天 客足点々  
パラダイスはここだと沸き立って

夜の集まりだ  
さぞ楽しかろう 玉突きもやろう  
ノロケくさって肩を抱く

(ケバブジョンソン 「遅い光」作詞…橋本悠)

# 楽しすぎてなんだ

うしきのどか

(鳥取環境大学環境学部)

大学に入って驚いたことは多いけれど、おおむね予想はしていた範囲だった。そういうことの一つに『興味の広さや何にやる気を出すか』があった。それを実感したのは昨年の学際、十月ぐらいだったろうか。バスに乗っていると、オシャレな男子たちが乗ってきた。私にはそれがオシャレであることはわかるのだが、私にはかっこいいと思えなかった。「そんなことにお金をかけるぐらいなら、もっと面白いこと、鳥取でできることすればいいのに」と思っていたぐらいだ。

バスは大学近くのカーブを曲がった。

その時はっと名案のように気付いたのだ。「私にとつてはそんなこと。しかし逆に彼らにとつても私がおもしろいと思うことはそんなことなのだろう」更にこんなことも思った。「人が持つエネルギーは一定で似ている。それをどこに使うかは人それぞれだ。一見凄そうな人に見えても、変換の能率が良かったり、別のところでバラ

ンスをとっているのだろう。健康しかり、学校の勉強しかり、ある人に依存していたりと」今思い返すと、当たり前のことなのだがその時の私は長年思い悩んでいた悩みが晴れたようだった。単純にその事実を実感しただけなのだが。

その後、私はその感覚について少々甘く見ていたことに気づく。いくら自分と興味が近くとも、その人が同じようにそこにエネルギーを費やすとは誰も言っていないのだ。『一緒に行動できるかも!』とおもっても、そこにエネルギーのかけ方が違うものだから、一緒に考えられなかったり真剣度が違ったりしてかなり、辛かった。やる気がありすぎてついていけないというのも、関心が低くて私しか動かないということもあった。大変だったというより、気持ちに差が出て精神的に辛いというほうが大きかった。

けれど、私は一人で学校の勉強とは違うことをするのは寂しすぎて、嫌だった。なにか自分で、自分が誰かと楽しめる事をできないだろうかと考えた。

それには私がどんなことをしたいのか説明する必要がある。私はあまり学校の基礎ばかりの勉強は面白くなかった。でも、学ぶことは面白いのだ。

私にとつての学びはどこにどんな植物が生えているのか、この土地はあんな風にできたから平たいとか、テレビに映っているのは白壁の建物だからきつと地中海の番組なんだろうなということだ。つまり、最初に面白い、何気ない事象があつて、そこから基礎を知るのが学びだと思ふ。それを共感してもらいたくて、一緒に活動してもらいたくて、また理解して協力してもらえ先生（私の通う大学は教授、講師などの区別があつても皆そう呼ぶ）を見つけ出したいと思つていた。

そこで私が考えたのは、その面白い事象を簡単に解説した本を選書した本屋をつくることだ。そこにはいくつかの要因が絡んでいる。一つ目は近所に本屋がないこと。昔（といつても十年ほど前）は大学にも本を置いていたと聞いたし、数年前には大学からアクセスのよい所に本屋があつたらしい。しかし、今は駅前に出るか、ネットで買うかぐらいいしか選択肢がなくふらつと本を買うということができない。二つ目に大学内にある売店が余りにも物寂しく、学生で何かできないかという話があつた。そこなら大学に密着し、受け入れられやすいのではないかと思つた。それらをと私の思惑を合わせて『三週間書店』という企画を立ち上げた。

選書の基準は、学びの入り口である大学生にとつて馴染みのある事象を扱った本。大学には二学部あつたのでそれぞれ、5人の先生から自身の専門に基づいて選書してもらつた。さらに快く私の活動を支援してくださつた定有堂店主の奈良さんにも、店内にある本から選書していただいた。結果は盛況……とは言えなかつたが、この活動を通して様々な人に会えたり、その人となりをもつと知ることができて私なりにはかなり満足だつた。ただ、やはり店として、プロジェクトとしては穴だらけでかなり苦しんだ。

今、それを改善して第2回目を行おうとしている。前回に引き続き、面白いと共感してくれる人がまた参加してくれていて願つたりかなつたりというところだ。活動は私の計画性のなさでなかなか危ない橋を渡っているが、私的にはやりたいことができて、大変楽しい。けれど、まわりの人がもつと安心して、または理解できるように活動でないと実感している。私と一緒に活動してもらっている人たちが楽しいと思えてやつと、私がおもう楽しい事のスタートラインに立てるのではないかと思つている。

# 青空と本屋



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

「本屋の青空」とは、『音信不通』の中で出会った言葉だ。定有堂書店に入ると、そこにある窓からわーっと広がっていく青空が見えるのだ。どんなに素敵なことだろう。なかなか私は窓を開けることができていないだけだ。

「青空」と「本屋」という言葉が結びつくと、私の目の前に浮かんでくる光景がある。青空をバックに本を売っているオレグさんだ。1996年から4年間、私はウラジオストク市内中心部から10キロほどの地区に住んでいた。交通の便もよくて、バスやトロリーバスの停留所が家から歩いて5分ほどのところにあった。バス停からはキオスクが立ち並ぶ広場を横切つて帰宅するのだが、そこにいつも一人の男性が立っていた。彼の前には縦横1メートルもない木のテーブル、というよりも台があり、

その上には隙間なく、時には題名だけが見えるように重ねてハードカバーを中心に本が並べられていた。新刊、モスクワから手に入りたくそうな本、ベストセラー、人気作家のもの、話題の本、翻訳もの、中でもデテクチフと呼ばれる推理小説が多かったように思う。

彼の足元には大きなバッグ。この中に入れて運んできて、まだ何冊かはバッグの底にあった。ソ連崩壊後の物資がない頃、担ぎ屋として中国東北部に仕入れに行く人が多かった。彼らのためにしつかりした大きなバッグ、というより袋が売られていた。もちろん中国製の。そこに本をいっぱい詰め込んで、朝にやつて来て夕方にくっついていくオレグさん。営業時間も自由だ。お金を持ち合わせていない時は「明日も来る？」と確認してから予約しておいたほうがいい。

オレグさんはたいてい誰かと話している。友達みたいにお客さんと話をしている。多分、本の内容や作家についてだろうが、本を売っているというよりも楽しく話をしてるのが仕事のように見える。お客さんも本を買うつもりはなくてもおしゃべりに来ているように見えた。買い物帰りにちよつと立ち話を、といった感じだ。本好きでおしゃべりが好きなロシア人にとっては、オレグさ

んはお気に入りの本屋さんなのだろう。

ずーっと気になっていた私も、ある日勇気を持って話しかけてみた。ロシア語で書かれた本を読むほどのレベルではなかったものの、一人暮らしの私は話し相手が欲しかったというのもあるが、いつもお客さんが楽しそうに話しているのを横目で見ながらうらやましかったのだ。その日から私はターニヤと呼ばれて、通りすがりに挨拶をするようになった。オレグさんと話したいがために前のお客さんが去るのを待っている日もあれば、あきらめて帰る日もあり、別のお店で時間をつぶしてはまた来て世間話をする間柄になった(えっ? 私って、今でも場所は違えど、定有堂書店で同じことをしているような……)

夏はサマータイムがあつたので9時ごろまでは明るい。仕事帰りにもオレグさんには会えた。いつもそこにくれる。そして本がある。冬の気温はマイナス10度から20度。風がなくてピリツとした空気が気持ちよく、そして青空が広がってれば寒さは気にならない。分厚いダウンのジャンパーを着て、毛皮の帽子と手袋と、寒さに震えているのは確かだ、足踏みしながら、でもやつぱり本と一緒に立っているオレグさん。

オレグさんのことを友人のサーシャに話したところ、その反応は意外なものだった。「私があなたの家に行く時は、いつも彼を避けて別の道を通るの。彼は私の夫の親友で結婚式には証人として立ち会ってくれたから。その後、離婚してしまったし、絶対に彼には私のこと言わないでよ」アフマートワの詩集をくれた友人の元夫の親友がオレグさんだったとは、私には嬉しいご縁に思えた。もしかしたらサーシャの家で、4人でテーブルを囲んだ日があつたかもしれないからだ。

オレグさんは本屋さん、でもウラジオストクの公園では青空の下、休日に自宅のビブリオチェーカ(意味については『音信不通』の34号をご参照下さい)から文学全集を持ってきて売っている人もいた。大切にしていた本を手放さなければならぬ状況にあつた人たち。

帰国するから思い出に、と写真を撮らせてもらった。一冊買おうとしたらプレゼントされてしまった。彼も気前のいいロシア人の一人だった。急に雨が降り出したら大変だっただろう。青空をバックに堂々と立っていたオレグさんは、いつも空を見あげていたのだろうな。今でもふと思ひ出す。

# 鳥取あれこれ その三十四

内田克彦

(地域研究家)

碧川企救男は、徳田秋声とも関わっている。亀井麻美氏のツイート『徳田秋聲(徳田秋声)の文学を中心につづやきます。』に、『白木蓮の咲く頃』に登場するMは企救男のことだ、とあった。早速、『徳田秋聲全集』に当たった。初出は、『改造』一九二七(昭和二年一月号)である。

手紙は紹介状であつた。引くらかへして見ると、それが北海道の或る大きな新聞の編輯にゐるM―氏からのもので、沢夫人の舟江を紹介したものであつた。

M―氏とは東京の二流どこの新聞社で、何かの用事で、一度顔を逢はせたことがあつたので、融は四十そこく、薄くなりかけた髪のもじやくくした其の風貌を直ぐ思ひ出すことができた。彼は親しくしてゐる有名な詩人M、M氏の義父に当る人なので、東京でも逢う前からその名を屢耳にしてゐた。

この後段に出てくるMは、三木露風のことだとすぐわかる。秋声は、当時再び「小樽新聞」に勤めていた企救男からの紹介をきっかけに、「沢夫人の舟江」と山田順子と出会い、のちに「順子もの」と言われる作品を数多く書くのである。

秋田県出身の山田順子は、弁護士の夫と結婚後小樽に住んだ。この小樽時代のことには、ネット上の大木志門著論文『メディアの中の「女性作家」・山田順子』によれば、一九二四年一月二三日付「小樽新聞」に「夜会髻くずしに襟巻きをまとつた姿」で登場したり、伊藤整の『若い詩人の肖像』にも記されたりしていることを紹介している。『若い詩人の肖像』から引用する。

弁護士法学士増川才吉という看板を出した文化住宅風の家があつた。その弁護士は私の学んだ中学校の先輩で、東京帝大の出身者であつた。その増川弁護士の細君は大変美人だということが中学生の間で評判であつた。(中略)北門日報というこの町の二流新聞に、その増川夫人の写真が大きく出た。(中略)増川順子夫人は「文壇のキシユク」徳田秋声に師事していて、時々上京してはその指導を受けていたが、目下その最初の長編小説「流るるままに」を執筆中で、そのため増川夫人は特に駅前大通りの新築

の北海ホテルに一室を借り受け、そこで作品の仕上げにかかっている

ところが、野口富士男著『徳田秋聲の文學』には、秋聲が順子と出会うのは三木露風の紹介である、とする。

三木露風は(略)、水守亀之助とともに秋聲とは親友の間柄にあつた三島霜川の厄介になつたことがあつて、そんな関係から舞踏家の石井漠とともに徳田家に寄宿した一時期もあつたほどなので、露風の紹介を得て来たことは無名の作家志望者としての順子にとつてはかなり有利な条件があたえられていたわけであつた。

また、ネット上の中川成美著論文『否定の前の肯定・山田順子と秋声』には、次の記述がある。

一般に順子と秋聲の出会いは三木露風の紹介と言われているが、露風と順子を結ぶ縁は露風が一九二〇年(大正九)五月から二四年(大正一三)六月まで北海道トラピスト修道院の講師をしており、順子がそこを訪れたことから始まった可能性が高い。

二人の出会ひのきっかけや紹介者について、本当のところはよくわからないが、おそらく『白木蓮の咲く頃』の中に出てくる「M氏」とはどんな人物なのか見当がつかなかったのではなからうか。

今年二月二六日から五月六日まで、東京の田端文士村記念館で、田端ゆかりの芸術家らの恋愛事情にスポットを当てた企画展「恋からはじまる物語」作家たちの恋愛事情」が開催された。案内チラシには、多くの「〇〇×〇〇」が掲げられている中で「山田順子×竹久夢二・徳田秋聲」も掲げられている。この企画展の紹介記事を載せた、四月二五日付の『山陰中央新報』には、「奔放さゆえに自分の道を閉ざしてしまったのは作家山田順子。画家竹久夢二ら数々の男性との恋愛で浮名を流し、文壇から消えていく。」と書かれていた。

なお、『女権』一九二七年四月号の目次には、未見だが、『女権』創刊号を見て(徳田秋声・山田順子)があがつている。恐らくかたが露風または企救男を通じて依頼したものであろう。それとも『女権』の編輯兼印刷人(かたは発行人)である、秋田県出身の鷺尾よし子のルートだろうか。本文を読んでみたいが『徳田秋声全集』には収録されておらず、著作一覧にも掲載されていない。何としても四月号を入手する必要がある。

(以下、続く) 二〇一九・五・二四

# フランクとブルックナー

## II 室内樂の嗜好

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

二人の宗教音楽家は、並べ語られる事も決してない、  
ほぼ同時代の大家であるが其の作風と特に内面的な精神  
性が酷似してゐる。

## I オルガニスト

教会で育つた、共にオルガンの名手。精神風土を教会  
に持ち日々生活の中で神への揺るぎない信仰と賛美が根  
元に。仏壇のカテドラルオルガニストとして要職を歴任  
し、即興性こそが信条でありポリフォニックな、或ひは  
豊かな和声構造美を基とし、空間に眩ひ大伽藍を打ち立  
てた19世紀のゴティックである点、ヴィルトウオーゾぶ  
りを謳はれた名手で在り乍ら虚飾を排したストイックな  
芸風（リスト、ベルリオーズ↓ヴァグナー）ばりの饒舌や  
大袈裟な劇的スペクタクルを遠ざけ）も人間性の似通ふ  
共通項である。

二人共舞台芸術、オペラ・バレエには、時代の潮流に  
乗って執心する事は無く（特にブルックナーはヴァグナー  
を偶像と崇め師と仰ぎ私淑したにも拘はらず）宗教的な  
大規模合唱曲（オラトリオ、ミサ）等を除いて絶対音楽、  
抽象芸術としての純粹器樂にほぼ専心した為、交響曲の  
次に室内樂が表現の核に。ブルックナーは、数こそ少な  
いが例へば重厚な弦樂五重奏を、そしてフランクは、余  
りにも有名なゴッナタ（ヴァイオリン奏者のみならずピ  
アニストの懂れのパート！）や弦樂四重奏、P<sub>1</sub>五重奏曲  
等珠玉の傑作を其の代表作に数へる。

## III 遅咲きのシンフォニスト

そして当然のやうに交響曲こそ二人の真骨頂。フラン  
クは唯一の交響曲がフランス系のみならず世界中の指揮  
者の挑むべき一つの壁となり幾多の名演を生んで来た。

ブルックナーは11の交響曲（2つの習作そして9つを  
数へる）がブラームスと並ぶ後期ロマン派の頂点と謳はれ  
特に第四、第七、第八、第九の四曲は近年コンサートレ  
パートリーとしてポピュラーとも云へる程人気を博して

ある。ただ、技法的に交響作家としては二人ともベート  
ホーフェンを敬愛して居ただろうがポリフォニストとし  
てフーガ作曲にあたり大バツハ、遡ってパレストリーナ  
を範と仰ぎ、ベートホーフェンばりの偏執狂誇大妄想ロ  
マンは見られなくあくまでストイックな厳格書法に準じ  
てゐる…。

#### IV 教師として

仏系の楽壇に勇名を轟かせ門下からダンデイ、ショー  
ソン、デュパルクをはじめ「フランキスト」と呼ばれる逸  
材を輩出したベルギー人。生涯の殆どをローマカトリッ  
ク教会圏内に暮らし南独・奥の音楽シーンを牽引したオー  
ストリア人、門下にF. シュミット等やはり幾多の大家  
を認むる。

#### V そして

フランクが交響曲を書き上げたのは齡60を悠に越へ、  
ブルックナーがシンフォニストの仲間入りしたのも40を  
たうに過ぎ、ともに真摯で勤勉・実直であったが所謂ス  
ローラナー、極めて遅いデヴューが不器用さを象徴して  
ゐる。何よりも篤い信仰が其の精神性の礎と成つて居り

神への全幅の信頼、そして生涯を捧げた祈り、賛美こそ  
が作品を貫く命題であり究極の目的であった。両者共に  
エロスやヴェルテル的な個人の感情表現は希薄で19世紀  
を生きた芸術家として「私」を全面に押し出す個人主義  
からは遠く、内省的な楽に依り唯、神を通じてロマンを  
追求し夢を追ひカトリシズムに身を捧げた。其の気高ひ  
祈りの筈は今も尚、轟々と世界中に交響して居る、いと  
も晴れやかに。

2019. 04. 19

- 「今回の二枚」① C. フランク交響曲三短調スウェーデン放送  
交響管弦楽団 (rec. 1996 ライヴ) ② A. ブルックナー第九  
交響曲ニ短調ヴィーナー・フィルハーモニカー (rec. 1988)  
①②共に指揮C. M. ジュリーニ



(画 A・I)

# 三人称小説の練習

## 土賀 啓三

(米国シガン州 隠棲)

遅い朝食の後、煙を深々と吸い込み、煙草もやめちゃうかな、と古賀は思案する。一旦、肺に溜めた後、ぷつと、盛大に煙を吐き出しながら、しかし、この食後の一服が旨いんだよな、それと酒を呑みながら吸う煙草。酒をやめられたんだから、煙草だってその気になればやめられるだろう、と禁酒二日目の古賀は考える。

一昨日、大腸の内視鏡検査の後、帰宅する足取りも軽く、なんか今日は体調がいいな、何でだろ、と訝しむ。通常は、昼近くまで、軽い吐き気や頭痛、そっか、昨晩呑まなかったんだ、いや、検査の前夜で呑めなかったんだ、と古賀は思い出す。酒を飲まなかったことなど、何年振りだろう。内視鏡検査は五十の歳に始まって、十年に一回だけど、まさか十年振り、ということはあるまいが……。

しかし、一晩酒を抜くだけで、こんなに体調が変わるものか。体だけではなく、頭もクリアで、実際午前中なのに「思考」ができていて、と古賀は苦笑する。

そうだ！ 何にでも中毒し易い体質の自分のことだ、酒

を飲まないことで得る Euphoria (多幸福感) に中毒する、と「ポジティブ」に思えば、酒もやめられるんじゃないかなろうか、と、なかなか綺麗で洒脱な筋の考え方だな、と古賀は自分のロジックに満足しつつ、断酒を決意したのだ。

あのさ、俺酒やめたじゃん。あとは飯なんだよな、喰った後吸いたくなるのは。飯食うのもやめちゃうかな、そしたら煙草やめられっかな、と古賀は妻のエレンに聞いかける。エレンは低脳夫の戯れ言に飽き飽きし始めていた。日本人である夫が、時折的外れな発言をするのは、英語が第一言語ではない者の愛嬌だと当初は甘受し、その一縷の望みにその後も縋って来たのだが、今年六十で退職し、日長うちに居て、その短絡な思考経路や、愚劣な発話を四六時中、目の当たりにする羽目になって、この男は、過去三十数年、よくも社会生活に耐えて来たな、しかも高給の範疇である所得さえ得て、と妙な感慨を新たにした。

一概に悪い考えでもないと思うよ、お酒と煙草が断てるんだったらね、と妻が答えると、暗いハイウェイを横切ろうとした鹿が、いきなりヘッドライトの光を浴びせられた際のような目で夫はエレンを眺めている。

じゃあ、俺、どうやって栄養取るの、と問う古賀。健

康体の Euphoria を感じながら死んでいくのと、二日酔いや、咳や痰に塗れながら、肺癌や肝硬変でじわじわ死ぬの、どっちを取るか、つていう選択じゃないの、とエレン。

やや鼻息を荒くして、なんか喧嘩売られてるような気がするんだけど、と云う夫に、妻は、夕食はラム・チョップスなんだけど、ワインは何呑む、と返す。

思考と決断に煙草は必需なので、まず一服つけ、羊や鴨のように Gamy (ジビエ臭のある) な肉と合わせるワインに一言を持つ古賀は、じゃ、ワイン棚から、重めのカバルネ探してくるよ、といそいそと地下へ降りて行った。

と、これは、三人称小説のお稽古のつもり。

先日、一人称の中編小説を書き了えた、と思ったものの、読み返してみると、一部、誰の視点で語られているのか不明瞭な箇所があることに気が付いた。「私」がその場に居合わせるのとは不可能で、顛末を知っていることは辻褃が合わない。

色々考えてみたものの、これを解決するには、やはりその状況を知悉している語り手を加えなければならず、

そうすると一人称小説として破綻する。「私」や「僕」、をナレーターとした小説しか書いたことはないが、より長くて複雑なものを書こうとすると、三人称小説の書き方を習得する必要がありそうだ。それも、一人称で書くように、ナレーターの主観を語らせるとしたら、三人称の複数視点でなければならぬ。書き了えたばかりの作品を書き直そうと試みて、その発想(視点)の相違に拠る、書かれ方の根本的な相違に驚き、とてもじゃないが、今更書き直す根気は無い。

ほんじゃ、練習だけしてみつか、と書いてみたが、書き出しの古賀の視点、それを受けてのエレンの視点までは何とかいいような気がする。しかし、後半、夫と妻の掛け合いになると、よりニュートラルなナレーターが介入しているように思われなくてもない。

暫し、低脳頭を悩ませたが、これはこれでいいんじゃないか、と思うことにした。人称の如何に関わらず、詰まるところ、全ての登場人物は作者の思惟を口寄せするイタコに過ぎず、僕の意図が十全に伝えられてさえいたら、今更小説作法の正統性に腐心する時間は残されていない。

(なお、本モノの古賀は、大酒を呑みますが、煙草は吸いません)

# 朴葉むすび

あきの素生

(くうねるめがね)



田植えが終わった後の水田が続く景色は、小さい頃から見慣れたものだが、最近やつとその美しさがわかるようになってきた。この季節、田んぼに囲まれた道を車で走ると、苗の青さと、遠くの山の新緑が空に映えて、清々しい。張られた水も涼しげでいい。

家に水田はなかったが、父の郷里には田畑があり、農繁期には家族で帰った。子どもたちは野山で遊び、たまに、少し離れた田んぼで作業している父やおじのところ、車に乗っておやつ(あんこの入ったお餅だった気がする)を持って行き、一緒に食べた。いつも晴れていた気がする。そんなわけはないけれど。気持ちのいい青空のイメージが浮かぶ。隅っこの方で田植えの真似ごとくらしいはしたと思うが、ほぼ遊んでばかりの子どもにとつては、楽しい思い出ばかりだ。

下校時に、田んぼを覗き込むのも好きだった。おたまじやくしにいつの間にか足が生えているのを見ると、なぜだかひと仕事終えたような気になった。見届けたぞ、という気持ちか。そのくせ、カエルになってしまおうと、小さいアマガエル以外は苦手だった。一番気に入っていたのはカブトエビで、授業で「カブトガニ」は大層貴重な生物だと習ったとき、近所の田んぼにたくさんいるぞ、と大層興奮した。サイズ感とか、淡水/海水のあれやこれやとか、あんなにごつごつしてたくない? とか、いろいろすつ飛ばして、世紀の発見にひとり浮かれた。誰にも言わなくてよかったとしみじみ思う。いや、得意げに触れまわったけれど、脳がまるっと無かったことにしてくれているのかもしれない。田んぼの中をじっと観察することもなくなつたが、今でもあの生き物たちは変わらずそこにいるんだろうか。顔触れがすっかり変わって、とか、いやあ静かなもんですよ、なんて、笑えない冗談みたいな話だ。

田植えにまつわる伝統芸能に、少しだけ参加していた時期がある。

木立の中にある田んぼが会場だった。田植えの時期で、日差しは初夏を感じさせるが、木陰はまだひんやりとしている。

華やかに飾り付けられた牛たちが代掻きした田に、紺の緋、赤いたすき、黒い手甲をまとい、編み笠を目深にかぶった早乙女（そうとめ）が、苗を手にして横一列に並ぶ。

田の神とされる「さんばい」さんが前に立ち、ささら竹を打ち鳴らしながら、朗々と歌い始める。

エー歌い始めは

それに応えて、早乙女たちも歌い、腰をかがめて苗を植える。

ヤハーレーヤレ

さんばいの歌と、それを追いかけるように返す早乙女の歌が重なり合って、独特な響きを紡ぎ出す。早乙女の後ろでは、笛や太鼓、鉦が鳴らされ、にぎやかに田植えが進んで行く。両側に房の付いたバチを、全身を使って大きく左右に振りながら打つ太鼓も見応えがある。

早乙女たちが田の中程まで苗を植え終えたとき、朴葉（ほおば）むすびが配られる。その名前のおり、朴の葉でくるまれたおむすびだ。農作業で汚れた手でも食べられるように、葉でくるんでいるのだという。昔の風習を知ってもらうため、デモンストレーションとしてその場で食べる。このおむすびが、何とも旨い。甘じよっぱく炊いた、黒豆と思しき豆が混ぜ込んであり、味もむす

び加減も程よい。田んぼの真ん中で、泥だらけの手で食べる、旨さが一層増す気がした。あまりにおいしく、いくつも食べたかったが、デモンストレーションなので、それは叶わなかった。食べ終わった後の朴の葉は、畳んで田んぼに埋め、肥やしとする。無駄がない。

後半も歌を掛け合わせて苗を植え、歌が終わると、笛と太鼓、鉦が調子を早めながら囃し立て、一番盛り上がったところで太鼓がどん、と鳴り、バチが置かれる。

田んぼから出て、手足の泥を小川で流し、早乙女の役目を終える。

悔やまれるのは、朴葉むすびのレシピを聞かなかったこと。今ならきつと、何のためらいもなく聞けるだろうに。



イラスト・あきの素生

# すごい服



ドラメリア (座敷わらし)

五月。ポロシャツの時季になった。大型連休の開始とともにフライング気味に着用していたが、大手を振って着られるようになって嬉しい。十月末までおよそ半年の間、わたしのワードローブではカラフルなポロシャツが大活躍する。職場に着ていく服に迷わずにすんで助かるなあ、と毎年しみじみ思う。

これがない冬場は、「おかしくなければよし！」ぐらいの意識で適当に服を選んでいる。もしポロシャツのよいうなものが冬場でもあれば着るだろうし、今の職場に制服ができれば、きつと着たきりになるだろうなと思う。基本的にお洒落不精なのだろう。

もういつそのこと、あらゆる外出に対応できるオールマイティな服が開発されないものか。近所のスーパーへも、オフイスへも、冠婚葬祭も、それ一着で対応可能な服。夢のようだ。……しかし現時点では難しそうだ。ステイプ・ジヨブズのように自分のスタイルを貫くしかないのか。

いやいや、いつか見たSFのように小型のホログラム装置のようなものがあれば、どんな服も、さらには髪型も、あるいは顔さえも、自在に変えることができるんじゃないか？

考えると夢はふくらんでいく。便利だなあ、その装置。服の保管場所にも困らないしなあ。実用化されないかなあ。

……でも犯罪に利用されそうだなあ。

たかだか外に着ていく服を揃えるのが面倒というだけで、よくこんなしょうもないことを考えている。雨に濡れずに通勤できる繭玉的な移動装置が開発されないか、とも雨や雪の季節はよく思っている。基本的に不精なのだ。



・編集後記:

とりぎん文化会館の中庭で開催された一箱古本市「トットリヒトハコ」に行ってきました(出店者ではなくブースのお手伝い)。焦げそうな好天の下、本の話も、それ以外の話もたくさんしました。楽しかったです。

ドラメリア(編集長)

なりわいを「レイヤー」という言葉で考えてみました。見る・観る・視る・看る、こんなところにも世界のフレヤーの入口。ミニニコミ魂はやって「みる」でしょうか。

奈良敏行(発行人)